

神奈川県発掘調査成果発表会 2015

◆ 日 時

平成27年7月26日(日) 13:00 ~ 16:30 (開場 12:30 ~)

◆ 口頭発表

- | | | | |
|---------------|--|----|----|
| 13:05 ~ 13:40 | 「原東遺跡 第3次調査」(相模原市緑区)
青木 雄大(大成エンジニアリング株式会社) | —— | 1 |
| 13:40 ~ 14:00 | 「王禅寺口横穴墓群 第2次調査」(川崎市麻生区)
横山 太郎(有限会社 吾妻考古学研究所) | —— | 3 |
| 14:00 ~ 14:35 | 「諏訪前A遺跡 第12地点」(平塚市)
北平 朗久(株式会社 玉川文化財研究所) | —— | 5 |
| 14:35 ~ 14:45 | 休憩(10分) | | |
| 14:45 ~ 15:05 | 「西富岡・長竹遺跡 第2次調査」(伊勢原市)
麻生 順司(株式会社 玉川文化財研究所) | —— | 7 |
| 15:05 ~ 15:40 | 「上粕屋・和田内遺跡 第2次調査」(伊勢原市)
土 任隆(国際文化財株式会社) | —— | 9 |
| 15:40 ~ 16:15 | 「北仲通一丁目遺跡」(横浜市中区)
太田 雅晃(株式会社 玉川文化財研究所) | —— | 11 |

◆ 紙上発表

- | | | | |
|--|--|----|----|
| | 「船久保遺跡 第2次調査」(横須賀市)
石川 真紀(株式会社 玉川文化財研究所) | —— | 13 |
| | 「神成松遺跡 第6地点」(伊勢原市)
土本 医(大成エンジニアリング株式会社) | —— | 15 |
| | 「浄業寺跡 第2次調査、三ノ宮・上竹ノ内遺跡」
(伊勢原市)
高橋 直樹・早田 利宏(大成エンジニアリング株式会社) | —— | 17 |

会 場：かながわ県民センター2階ホール

主 催：神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

原東遺跡 (第3次調査)

所在地 相模原市緑区小倉字原 270 番地 1

調査期間 平成 26 年 9 月 30 日～27 年 3 月 2 日

調査面積 1,625 m²

調査組織 大成エンジニアリング株式会社

担当者 青木雄大・市川康弘

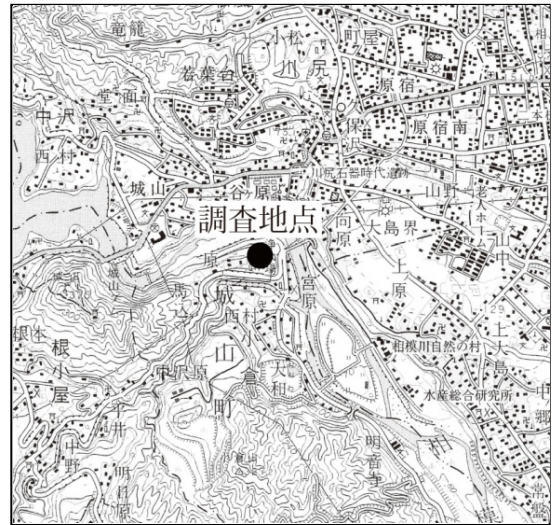
調査概要 本遺跡は J R 線・京王相模原線橋本駅の西方約 5.0 km に位置し、地形的には標高 117～118m を測る相模川左岸の段丘平坦面に立地しています。発掘調査の結果、近世、縄文時代（早期・中期）、旧石器時代の遺構と遺物が出土しました。

縄文時代 主な遺構として竪穴住居址 9 軒、竪穴状遺構 2 基、屋外埋設土器 2 基、焼土址 2 基、土坑 38 基、陥し穴 18 基、炉穴 6 基などが発見されました（第 2

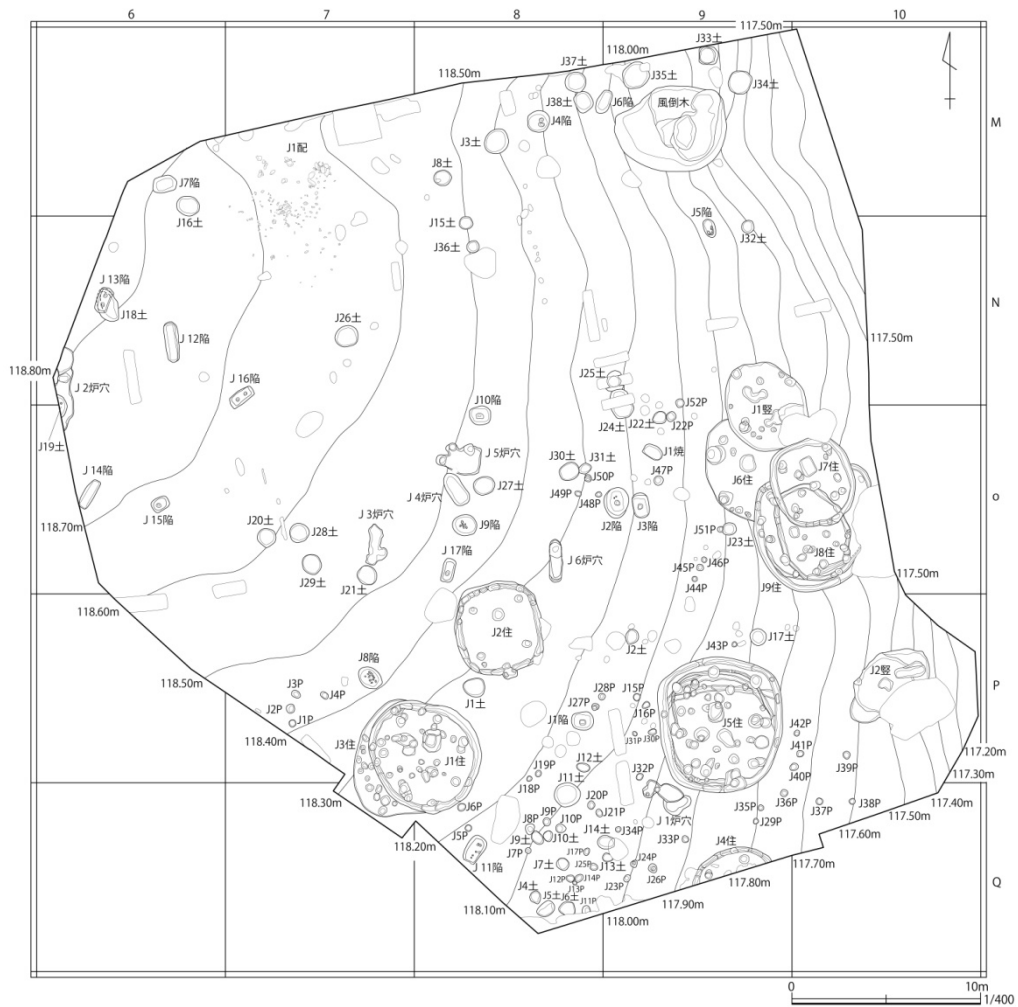
図）。竪穴住居址は中期勝坂式期と曾利式期のもので、平面形は円形ないし楕円形を呈します。竪穴住居址は複数が重複しているものや、数回の建替えが考えられるものが見られます。また、竪穴住居址の中には入口部に祭祀的なものと思われる立石（写真 1）や、土器を地下に埋設する埋甕（写真 2）を有するものもあります。炉は石囲炉が主に見られ、竪穴住居址の中央やや北寄りに配置されており、形態は長方形や楕円形を意識した作りをしています。土坑は大量の礫を伴うものが発見されました。礫は下層から底面にかけてまとまった状態で検出されており、人頭大程の角礫や岩盤礫が出土しています。陥し穴は西から東へ下る傾斜に直交して配置されていますが、規則性は見られません。早期の炉穴は平面形が不整形や長楕円形のものが見られ、調査区中央に分布が集中しています。遺物は縄文時代中期の土器と打製石斧などの石器が主体ですが、早期の土器（条痕文）や草創期の尖頭器も出土しました。縄文土器の特徴として曾利式が多く出土しており、また他地域の土器も出土しています。

まとめ 本遺跡はこれまで 2 回の発掘調査が行われており、その調査成果から径 50～60m 規模の環状を呈する縄文時代中期の集落跡と考えられています。今回の調査地点は集落範囲の西側に位置し、縄文時代中期の竪穴住居址が南西から北東にかけて展開することが新たに明らかになりました。今後はこれまでの調査成果を考慮しながら集落の様相を考える必要があります。また、相模川を挟んで対岸に位置する川尻遺跡や川尻中村遺跡など周辺の縄文時代中期の集落跡との関連も検討すべき課題であると言えます。

（青木雄大）



第 1 図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 原東遺跡 調査区全体図



写真1 J1号竪穴住居址 立石(北西から)



写真2 J5号竪穴住居址 埋甕(西から)

王禅寺口横穴墓群 第2次調査

所在地 川崎市麻生区王禅寺東5丁目地内

調査期間 平成26年5月12日～5月28日

調査面積 14.3㎡

調査組織 有限会社 吾妻考古学研究所

担当者 横山太郎・有馬多恵子

調査概要 本遺跡の所在する地点は多摩丘陵の中央部、川崎市の北西側に当たり、小田急電鉄小田原線柿生駅の南東1.9km、同新百合ヶ丘駅の南方2.7kmに位置しています。王禅寺という地名は、本遺跡の北東約850mに現存する王禅寺（星宿山蓮華蔵院）の寺領であったことに由来するものです。今回の調査地点から南西約800mの位置に谷

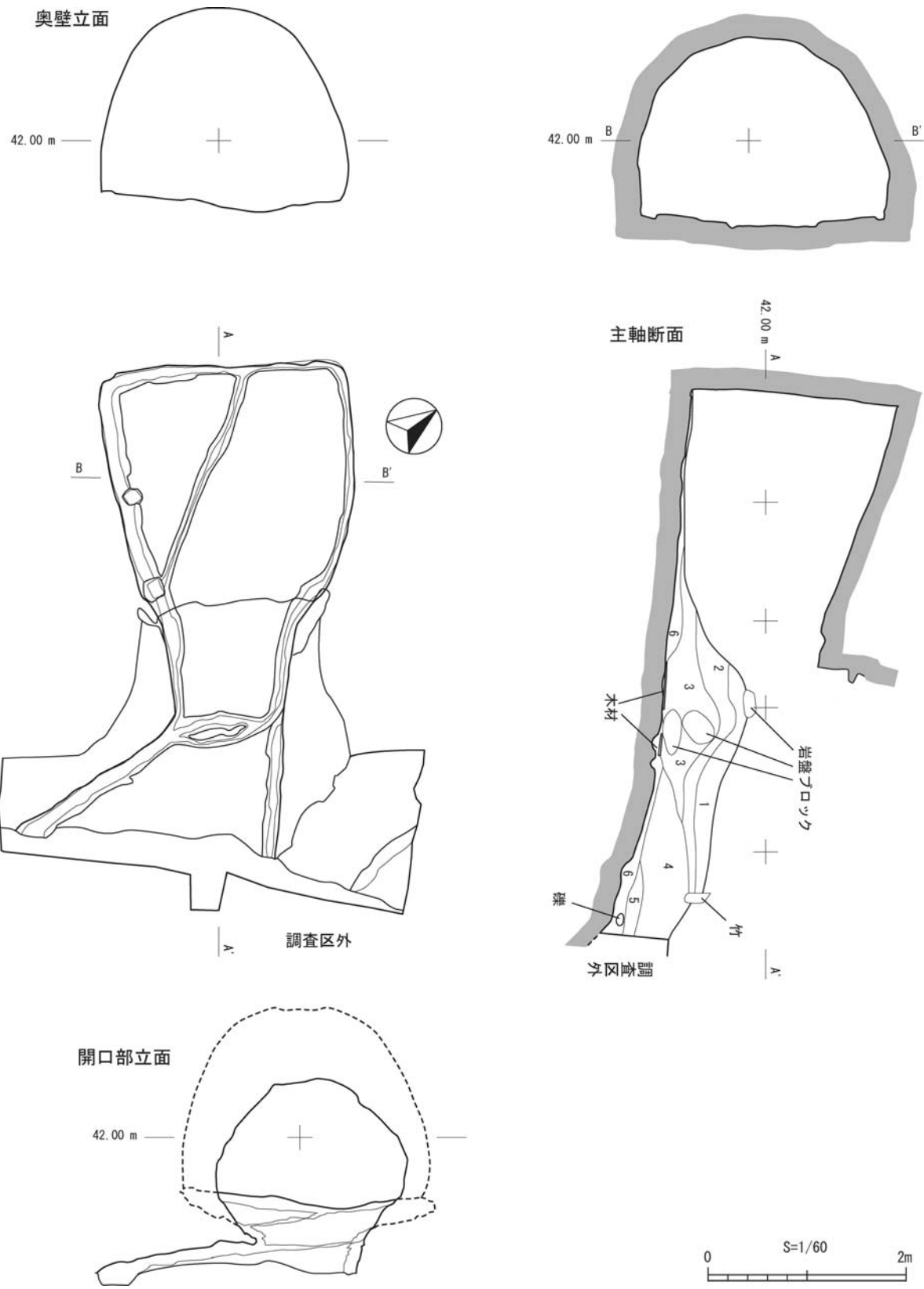


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本川が流れており、周辺の台地は谷本川の支流である麻生川・真福寺川・早野川によって複雑な起伏が形成されています。この鶴見川とその支流により開析された小支谷の崖面には、多くの横穴墓群が存在しており、早野川右岸の崖面に展開する本横穴墓群もそれらのうちのの一つです。昭和56年に行われた分布調査では2区10基からなる横穴墓群として報告されており、そのうちの2区とされた北側の支群の北端の2穴が平成24年度に調査されています（第1次調査）。今回行われた第2次調査では、同じ2区の最も南側に位置する5号横穴墓が対象となりました。

5号横穴墓は床面の標高が40.7～41.2mで、第1次調査の1号横穴墓よりも約2.3m高く、東側の崖裾部との比高は約8mあります。調査着手時には玄門の上部1/3程度が南東向きに開口していました。流入土を除去した結果、玄室の平面形は逆台形で、羨道との境は前壁が退化して屈曲のみ残した形状であることがわかりました。玄室の規模は奥壁の幅が2.51m、主軸方向に2.55mを測り、床面積は5.84㎡となります。玄室の横断面形はアーチ形で、天井は奥壁で高さ2.07m、玄門で高さ1.57mを測り、開口部に向かって直線的に下降していました。横穴全体の主軸の全長は4.74mで、主軸方位はN-55°-Wを指します。流入土の最下層には近代以降の釘や磁器片などが含まれており、遺構の形状に部分的に後世の改変が見られました。このような状況のため、副葬品など横穴墓の構築時に関わる遺物は出土しませんでした。

まとめ 王禅寺口横穴墓群5号横穴墓は、関連する遺物が残されていなかったため詳細な時期を明らかにすることはできませんでしたが、形状などから概ね古墳時代後期、7世紀代の所産と考えられます。覆土中に径10cm程度の川原石が少量含まれており、第1次調査の1号横穴墓では礫床が確認されていることから、本横穴墓にもかつては礫床が施されていたのではないかと推測しています。本横穴墓と1号横穴墓は玄室の形状や規模も似通っており、周辺地域に一般的に見られる横穴墓の系譜に位置づけて差し支えないものと考えられます。（横山太郎）



第2図 5号横穴墓

すわまえ
諏訪前A遺跡 第12地点

所在地 平塚市東真土二丁目地内
調査期間 平成26年4月15日～12月15日
調査面積 1,218.7㎡
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 北平朗久・伊藤貴宏

調査概要 本調査は、都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施され、3面にわたって遺構が検出されました。1面からは近世以降、2面からは中世、3面からは古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構が検出されました。

近世以降 道状遺構1条、溝状遺構5条、畝状遺構38条、土坑21基、ピット17基が検出されました。道状遺構および溝状遺構は、すべて東西方向に伸びます。畝状遺構は、南北方向に伸びる30条と東西方向に伸びる8条に分けられます。土坑は、主に調査区北側で溝状遺構と重複して検出されています。各遺構の覆土には、宝永火山灰が含まれるものが多くあります。

中世 畝状遺構25条、土坑11基、ピット25基が検出されました。畝状遺構は、東西方向に伸びる23条と南北方向に伸びる2条に分けられます。土坑は調査区北東側を中心に検出されています。遺構外からは龍泉窯系の青磁碗（12世紀中葉～13世紀前半）の小片が出土しました。

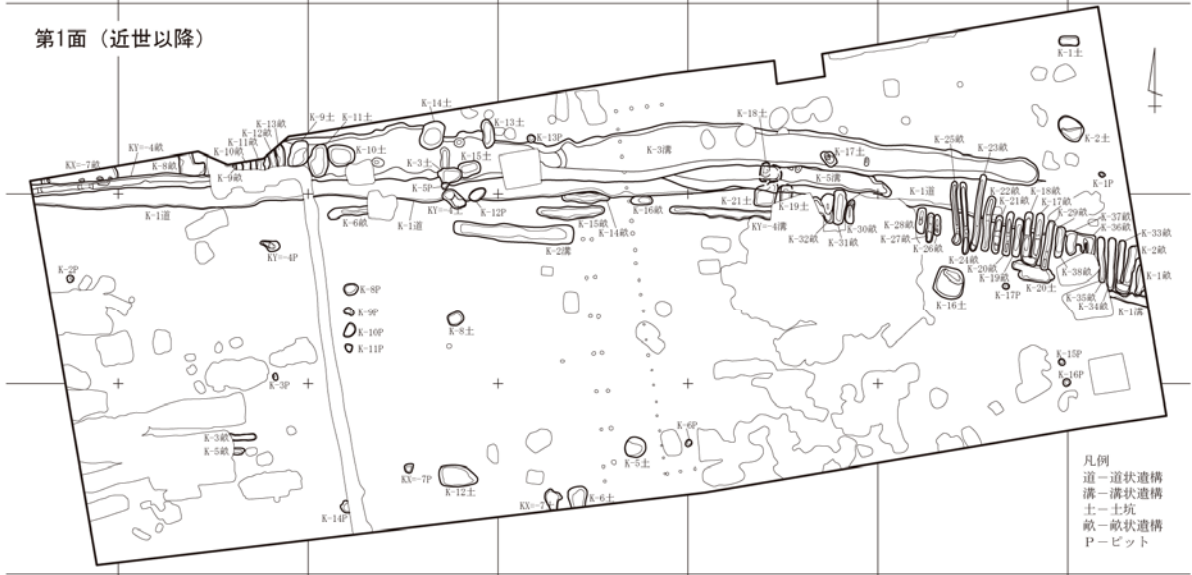
古墳時代後期～奈良・平安時代 竪穴住居址45軒、掘立柱建物址3棟、竪穴状遺構2基、道状遺構1条、溝状遺構13条、井戸址2基、土坑62基、ピット172基が検出されました。竪穴住居址は、調査区中央の北西寄りおよび東側に重複しながら密集しています。7世紀代から10世紀代まで存続したと推定され、7世紀後半および8世紀中頃の住居が多く検出されました。掘立柱建物址はいずれも側柱式で、規模は桁行3間×梁行2間、桁行3間×梁行3間、桁行4間×梁行3間です。道状遺構は、北西から南東方向に伸び、波板状圧痕が確認されました。溝状遺構は、南北方向が4条、東西方向が3条、北西-南東方向が3条、北東-南西方向が3条に分けられます。土坑の平面形は楕円形や略円形のものが多く、規模は長軸で1～2mが中心です。

まとめ 諏訪前A遺跡第12地点からは、主に古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されましたが、そのなかでも古墳時代後期（7世紀代）の竪穴住居址が多く検出されました。今回の調査地点は、相模国府推定域に含まれますが、官衙的遺構や遺物も極めて少ないことが指摘できます。当該地を含め、周辺には官衙関連の遺跡が数多く存在しており、それらを検討するうえで資料の追加は大きな成果と考えられます。（北平朗久・伊藤貴宏）

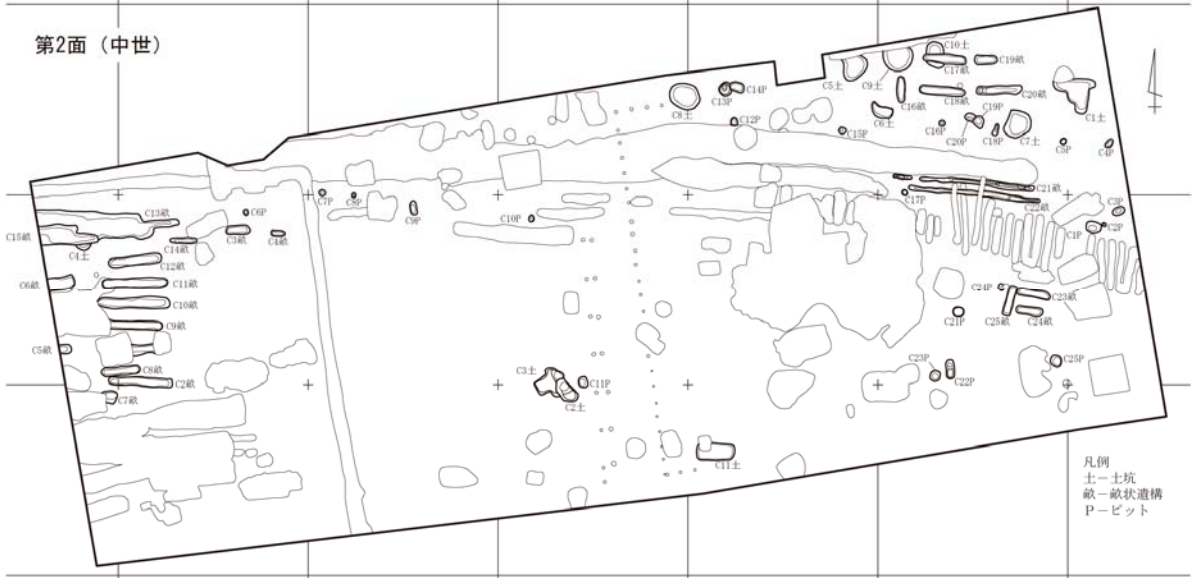


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

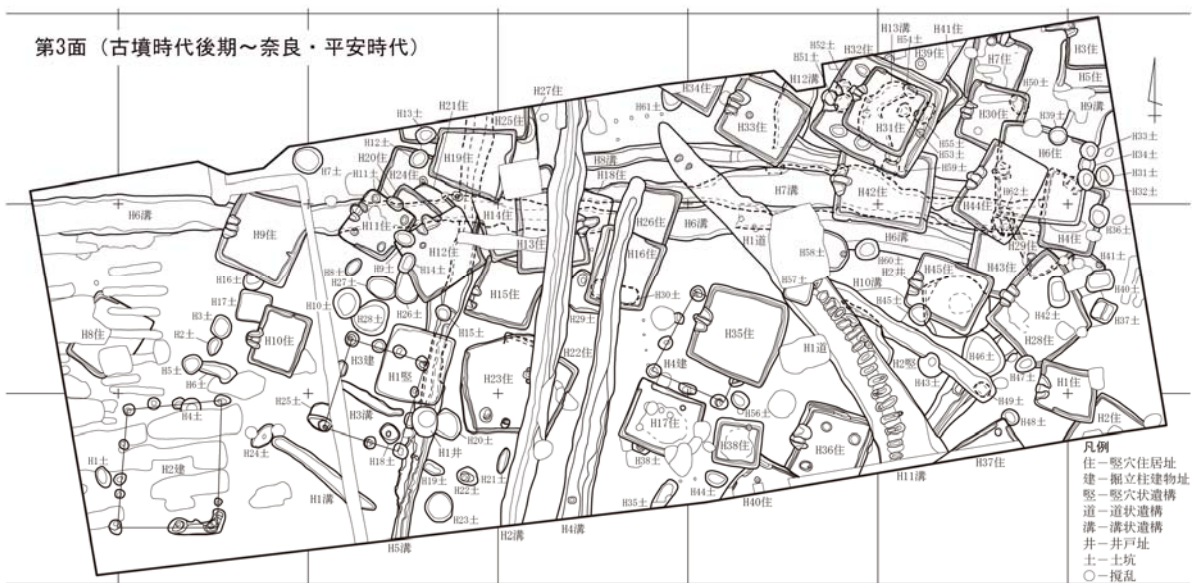
第1面 (近世以降)



第2面 (中世)



第3面 (古墳時代後期～奈良・平安時代)



第2図 調査区全体図 (1/400)

西富岡・長竹遺跡 第2次調査

所在地 伊勢原市西富岡地内

調査期間 平成26年8月25日～継続中

調査面積 2,507 m²

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 麻生順司・御代七重

調査概要 本遺跡は小田急小田原線伊勢原駅の北西約3kmに位置します。地勢的には丹沢山塊の東端に位置する大山の東麓にあたり、上粕屋扇状地を東西に縦断する渋田川支流の左岸に立地します。今回の調査は伊勢原市西富岡地内で新たに計画された県道603号（上粕屋厚木）と旧県道603号との交差点部分の道路改良工事に伴って行われました。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

中・近世 竪穴状遺構2基、掘立柱建物址1棟、土坑30基、道状遺構3条、溝状遺構12条、ピット多数が発見されました。2号竪穴状遺構は鍛冶遺構と考えられる遺構で、1号掘立柱建物址は2間×4間の南側柱列に^{ひさし}廂を持つ高床式の遺構と考えられるものです。道状遺構では北西-南東方向に延びる2号道状遺構が現状では最も大きく、この遺構の南東部で4号道状遺構と5号道状遺構が分岐ないし合流して交差点となっているようです。最下層に宝永火山灰が厚く（30cm前後）堆積し、その直上にはローム土や黒色土などによる硬化面が20枚以上検出されていることから、近代まで途切れることなく改修が行われて使用されていたことが推定されます。また、溝状遺構も2号道状遺構に直行するものが多く認められ、さらに断面形がV字あるいは逆台形状を呈して覆土上層に硬化面を持つものが多いことから、これらの溝状遺構も2号道状遺構に関連する遺構と考えられます。

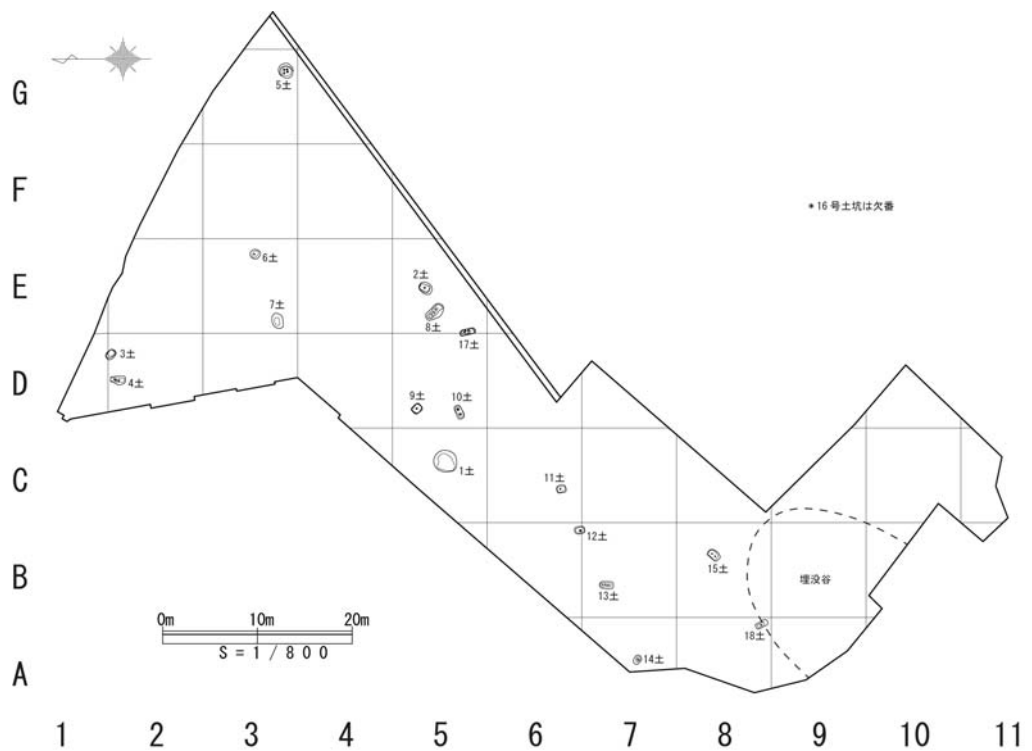
平安時代 発見された遺構は調査区の北東側に位置する竪穴住居址1軒です。平面形は方形を呈し竪穴の北隅にカマドを持つタイプです。周溝はカマドを除いて全周し、柱穴は住居の中央部に1本検出されました。また、床面には小規模な地床炉も2ヵ所確認されています。遺物はカマドを中心に土師器甕・坏、須恵器坏、灰釉陶器片等が出土しました。これらの遺物から時期的には9世紀後半～10世紀初頭に属する住居と考えられます。

縄文時代 縄文時代の遺構は、陥し穴状土坑15基と土坑2基です。陥し穴状土坑の深さは50cmから140cmを超えるものまで認められ、底面には1～4本の小ピットが認められました。土坑は円形と楕円形を呈するものが認められ、深さは30cm前後を測ります。遺構の時期は遺物が認められないことから不明ですが、陥し穴状土坑はその特徴から縄文時代中期以前に属するものと考えられます。

まとめ 今回の調査では中・近世を中心に平安時代と縄文時代に属する遺構や遺物が検出されました。現在は旧石器時代の調査を行っているところであり、今後の成果が注目されます。（麻生順司）



第2図 中・近世～平安時代遺構配置図



第3図 縄文時代遺構配置図

中世の社寺関連遺構を発見

かみかすや わだうち
上粕屋・和田内遺跡 第2次調査

所在地 伊勢原市上粕屋 2946-4 他

調査期間 平成 26 年 2 月 3 日～27 年 3 月 31 日

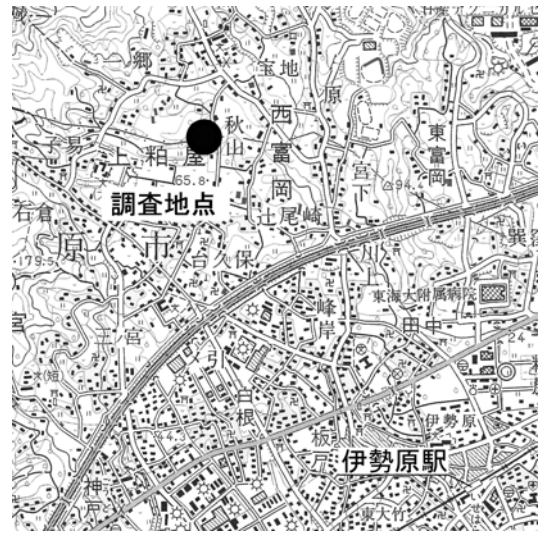
調査面積 2,998 m²

調査組織 国際文化財株式会社

担当者 脇本博康・土 任隆

調査概要 本調査は、神奈川県広域幹線道路事務所（現平塚土木事務所）による県道 603 号（上粕屋厚木）の道路改良工事に伴う事前調査です。

調査地点は小田急小田原線の伊勢原駅から北西へ約 3.1km に位置し、地形的には、丹沢山地東端の大山の南東側、河岸段丘上、標高 50～55m に立地しています。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

江戸時代の天保 12 年 (1841) に成立した『新編相模国風土記稿』によれば、本遺跡周辺には熊野神社や別当寺の極楽寺（鎌倉幕府の有力御家人である糟屋氏一族の菩提寺）が所在していました。

検出された遺構 今回の調査では近世、中世、奈良・平安時代、弥生～古墳時代、縄文時代の遺構・遺物が検出されました。ここでは、中世前半に該当すると思われる遺構のうち2区から発見された石組み遺構について紹介します。

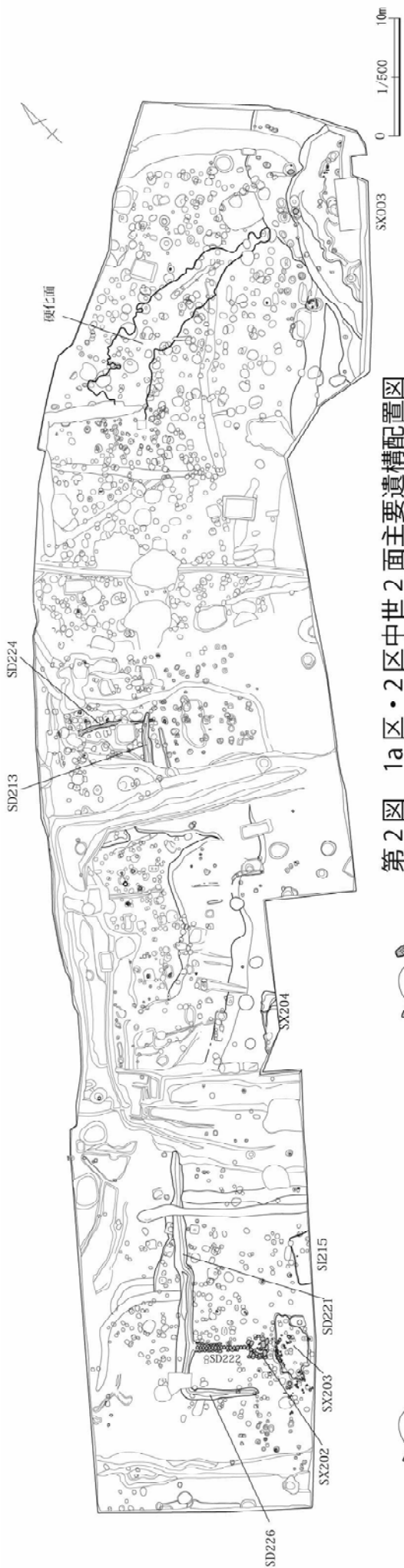
石組み遺構 中世2面で検出された遺構で、方形に河原石を並べた SX202、盛土の中央に石を並べた基壇状の SX203、SX202 に接し北西方向に走る石組みの溝 SD222 からなります。

SX202 は平面形が 2.09m×1.85m の方形を呈し、河原石の平らな面を上に向けて並べています。中央及び北東側は石が欠損しています。SX203 は平面が 5.89m×3.22m の不整形で、中央に土を盛り上げて石を並べた基壇状を呈しています。後世の土坑やピット等により欠損していますが、本来は長方形を呈していたものと思われます。石が並んだ内側は、焼土と炭化物、河原石、浅黄色の粘土が堆積していました。SD222 は、SX202 の北西辺中央から北西方向に走る石組みの溝で、長さ 4.5m、上端幅 0.6m を計ります。扁平な河原石を両側面及び底面に並べています。北西端はこれらの 3 基の石組み遺構を L 字状に囲む溝状遺構 SD221・226 に接続しています。

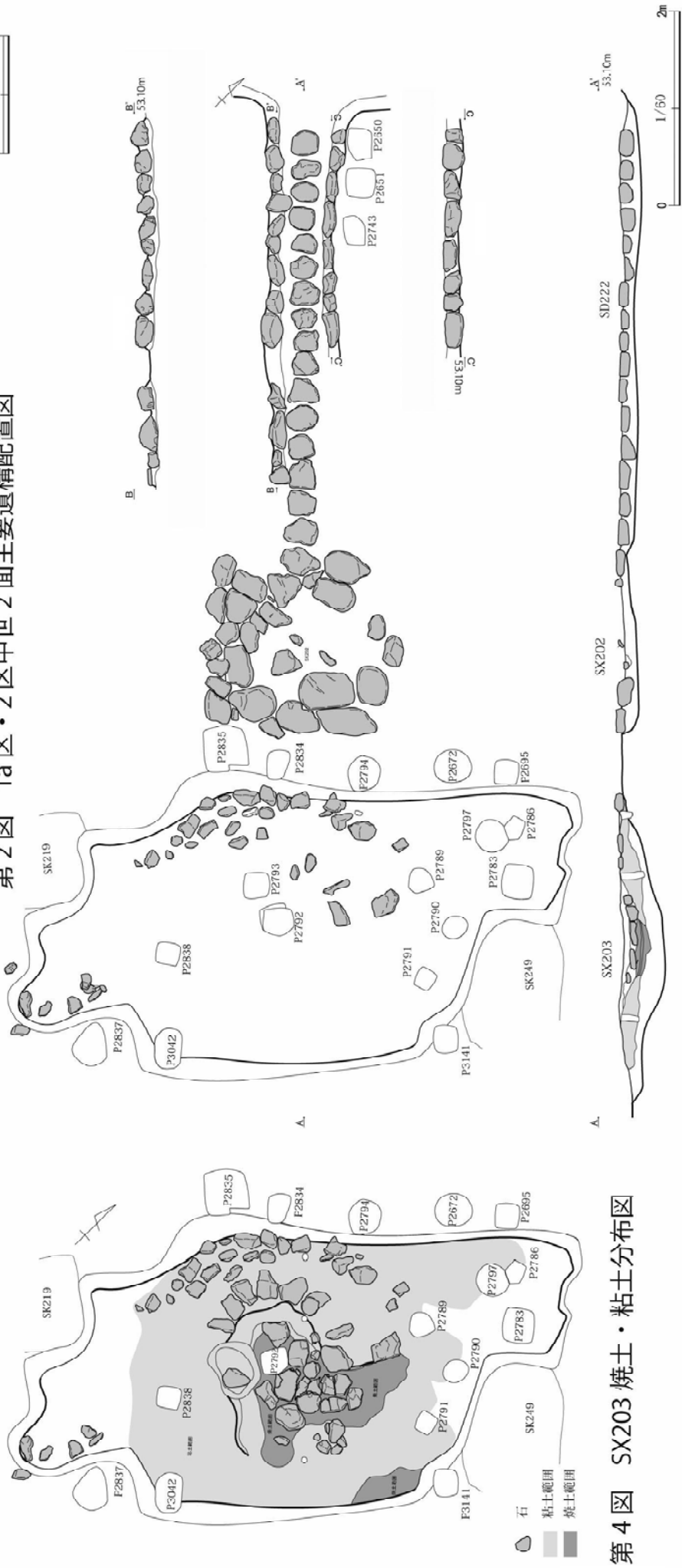
出土遺物 SX203 の表面で平瓦 2 点・軒平瓦 1 点の破片と焼土内から陶器の破片 2 点（細片の為、時期・産地不明）等が出土しました。

まとめ これら遺構の性格については検討中ですが、瓦の出土が見られ、中世初期には周辺に熊野神社や極楽寺が存在していたこと等から、中世前半頃の社寺に関連した遺構と推測されます。

(土 任隆)



第2図 1a区・2区中世2面主要遺構配置図



第4図 SX203 焼土・粘土分布図

第3図 石組み遺構 SX202・203・SD222 平面・立面・断面図

「横浜日本人市街」における初の調査

きたなかどおり

北仲通一丁目遺跡

所在地 横浜市中区北仲通1丁目1番1

調査期間 平成26年6月9日～12月12日

調査面積 401.3 m² (拡張区36.6 m²含む)

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 小林晴生・太田雅晃

調査概要 本調査地点は、県庁新庁舎駐車場内に位置しており、地勢的には東京湾に接する砂嘴の上に立地しています。

本調査地点を含む横浜関内地区は、安政6年(1859)の開港後、運上所(※当時の税関、現在の県庁本庁舎)東側の日本大通を境に、南西側を外国人

居留地(山下居留地)、北東側を日本人市街に分けられました。本調査地点は運上所に面した日本人市街に位置しており、開港以来、明治を代表する横浜商人である渡邊福三郎とその子孫が代々店舗を構えていた土地として知られています。今回の調査で、3期にわたる遺構面の存在が明らかとなりました。

第1面：明治時代前期～大正時代の遺構群で、切石基礎建物址や礎石建物址、便所遺構、瓦敷遺構、土坑などを検出しました。主な遺構は切石基礎建物址(布掘りの中に土丹を充填し、その上に切石を複数段重ねて基礎とした建物)です。建物の上面には瓦礫や焼土が堆積しており、出土した遺物や当該地の古写真も踏まえると、今回検出した建物群は大正12年(1923)の関東大震災によって倒壊した渡邊合名会社の蔵および倉庫等と推定されました。その他、第1面では、西洋磁器、近代色絵京焼、ウシの骨、鮑^{あわび}などの貝類を含む多数の遺物が投棄されたゴミ穴(21号土坑)を検出しました。

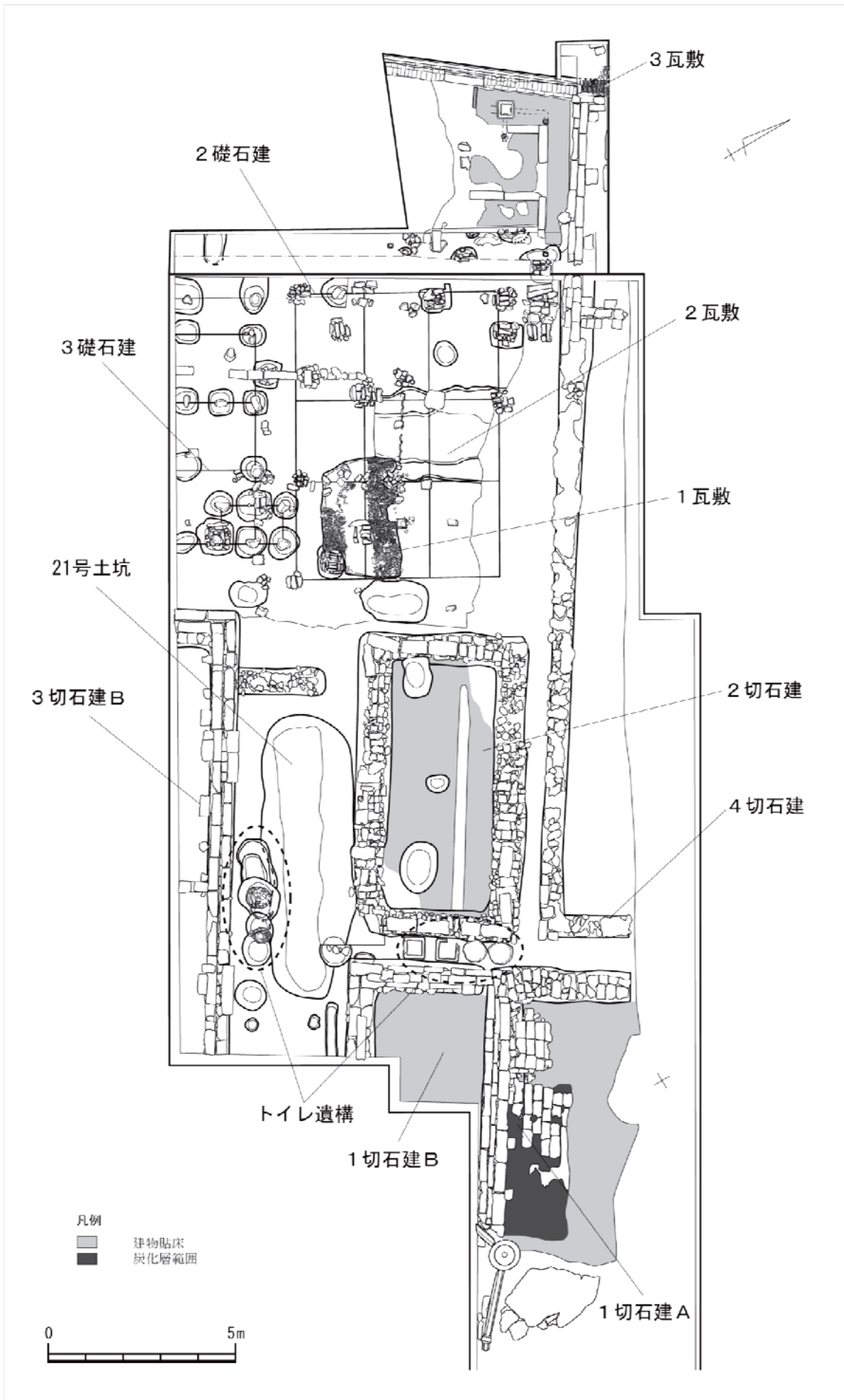
第2面：幕末～明治時代初頭の遺構群で、開港直後の建造物にあたります。慶応2年(1866)の大火による焼土層の下から検出されました。主な遺構は掘立柱建物址、柵列、井戸、土坑などで、柵列によって仕切られた空間に建物、井戸、ゴミ穴などが点在している状況が明らかとなりました。

第3面：弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の遺構群で、竪穴住居址、土坑などを検出しました。主な遺構は、稀少な手焙形土器^{てあぶり}が出土した85号土坑です。本調査地点を含む周辺一帯は、東京湾に接する砂嘴の上に立地しており、旧横浜村のあった微高地にあたります。海岸に面した旧地形上には、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての集落の一部が残されていることが分かりました。

まとめ 今回の調査は、横浜日本人市街初の調査事例となります。明治期を代表する横浜商人の店舗跡が確認されたことは大きな成果です。また、開港直後に構築された遺構も残っていることが分かりました。その他、今回の調査地点では弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の遺構が検出されています。当該地周辺でこの時代の遺構が検出されたのは初めてのことであり、砂嘴の微高地に集落の一部が遺存していることが分かりました。(太田雅晃)



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 明治前期～大正期の遺構群（第1面）

ふなくぼ
船久保遺跡第2次調査

所在地 横須賀市林5丁目 2473 他

調査期間 平成26年8月28日～継続中

調査面積 約7,330 m²

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 石川真紀・前川昭彦

調査概要 船久保遺跡は神奈川県南東部に張り出す三浦半島のほぼ中央部の西海岸域にあり、横須賀市西部の小田和湾を眼下に見渡す標高30～40mの起伏に富んだ丘陵上に位置しています。今回の調査は神奈川県横須賀土木事務所による県道26号（横須賀三崎）三浦縦貫道路Ⅱ期工事に伴う事前調査として実施されました。調査地点は平成25年度に実施された第1次調査の西側に隣接しています。

近世以降 段切り状遺構3箇所、溝状遺構9条、小溝群2箇所、土坑66基などが発見されました。これらの遺構はすべて耕作に関連する遺構と考えられます。段切り状遺構は斜面地を開削して平場を造ったもので、溝状遺構は土地の境界を表していたものと考えられます。小溝群は畑の耕作による畝状の溝の一群と考えられ、段切りや溝で区画された平坦面に造られています。これらの遺構から出土した遺物を見ると、江戸時代以降と推測されます。

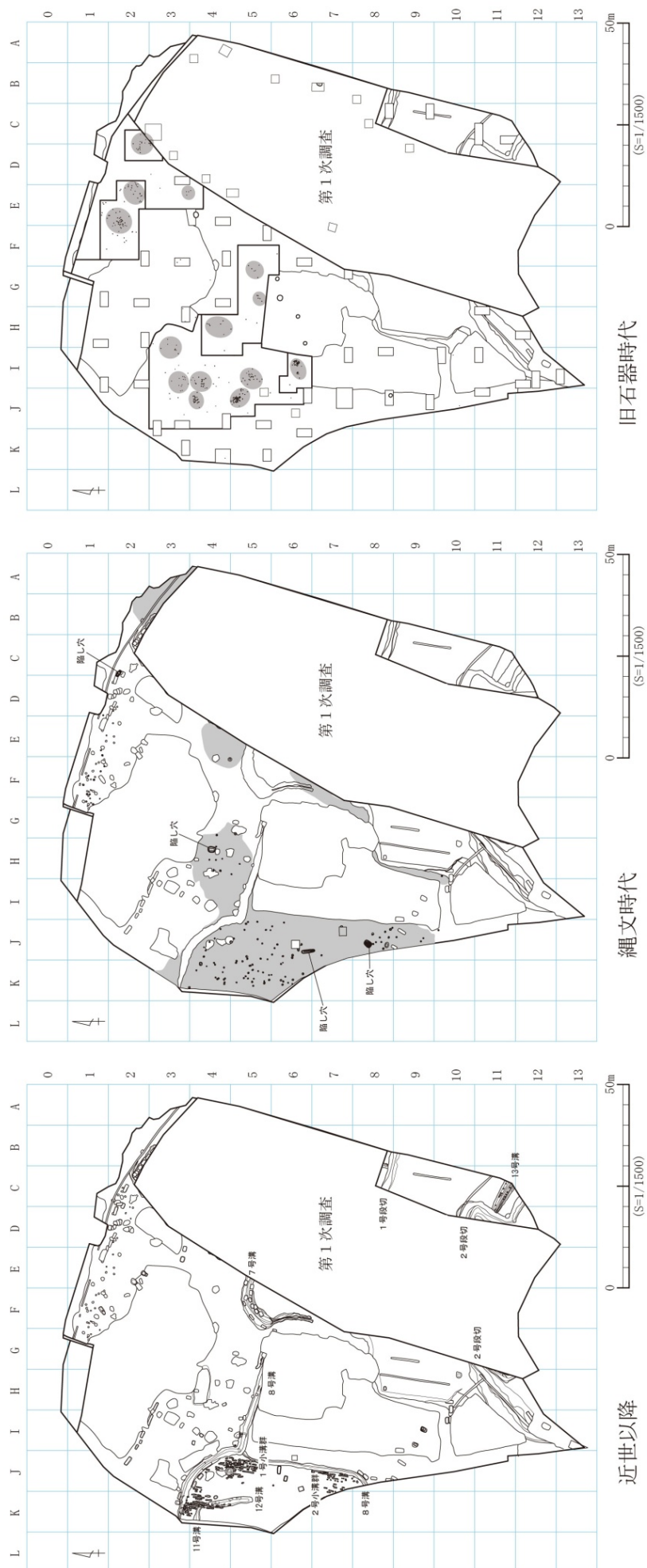
縄文時代 陥し穴状土坑4基、土坑2基、ピット118基が発見されました。陥し穴状土坑は、底部に複数のピットを持つものや、下部を狭く掘り、獲物の自由を奪う構造を持った「Tピット」などと呼ばれるものがあります。また調査区西側の緩斜面では、土器片や石器類、大小の礫が密集する遺物集中区が検出されました。出土した土器群は、早期初頭の大浦山Ⅱ式土器をはじめ、早期後半の条痕文系土器、前期最終末の十三菩提式土器があります。

旧石器時代 ローム層中に含まれる遺構や遺物の確認を目的としたグリッド（4×2m）を45箇所まで設け、この内9箇所から重層的に石器や剥片が出土し、さらに2箇所です坑状の落ち込みが発見されました。グリッドを拡張して遺物の広がり調査したところ、相模野B1～B2相当層からは礫群1箇所と9箇所の遺物集中区が確認され、ナイフ形石器やスクレイパーなどが出土しています。さらに下層からは3箇所の遺物集中区が確認されたほか、単独の出土でしたが黒曜石製の台形石器が1点出土しています。なお、土坑状のプランは4箇所確認されています。

まとめ 本遺跡の調査では、近世以降から旧石器時代まで遡る複合遺跡であることが明らかとなりました。なかでも旧石器時代の土坑の検出例は少なく、県内では横須賀市打木原遺跡や高原北遺跡、一本松遺跡など数遺跡が知られるのみです。現在も旧石器時代の調査を継続して行っており、遺跡の内容については今後の調査で明らかになると考えられます。（石川真紀）



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 船久保遺跡第2次調査遺構配置図 (1/1,500)

神成松遺跡第6地点

所在地 伊勢原市上粕屋 1429-3
調査期間 平成 26 年 4 月 1 日～27 年 1 月 31 日
調査面積 2,969 m²
調査組織 大成エンジニアリング株式会社
担当者 土本 医・伊藤俊治
調査概要 神奈川県広域幹線道路事務所（現平塚土木事務所）による県道 603 号（上粕屋厚木）の道路改良工事に伴う、事前の発掘調査として平成 25 年 9 月 2 日から開始しました。神成松遺跡は小田急小田原線伊勢原駅から北西約 3 km に位置します。調査地点は大山の南縁に広がる上粕屋扇状地内で、標高約 70m の谷底に立地します。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本年度は主に斜面を中心に調査し、近世から中世の遺構面を 4（近世 1・中世 3）面確認しました。

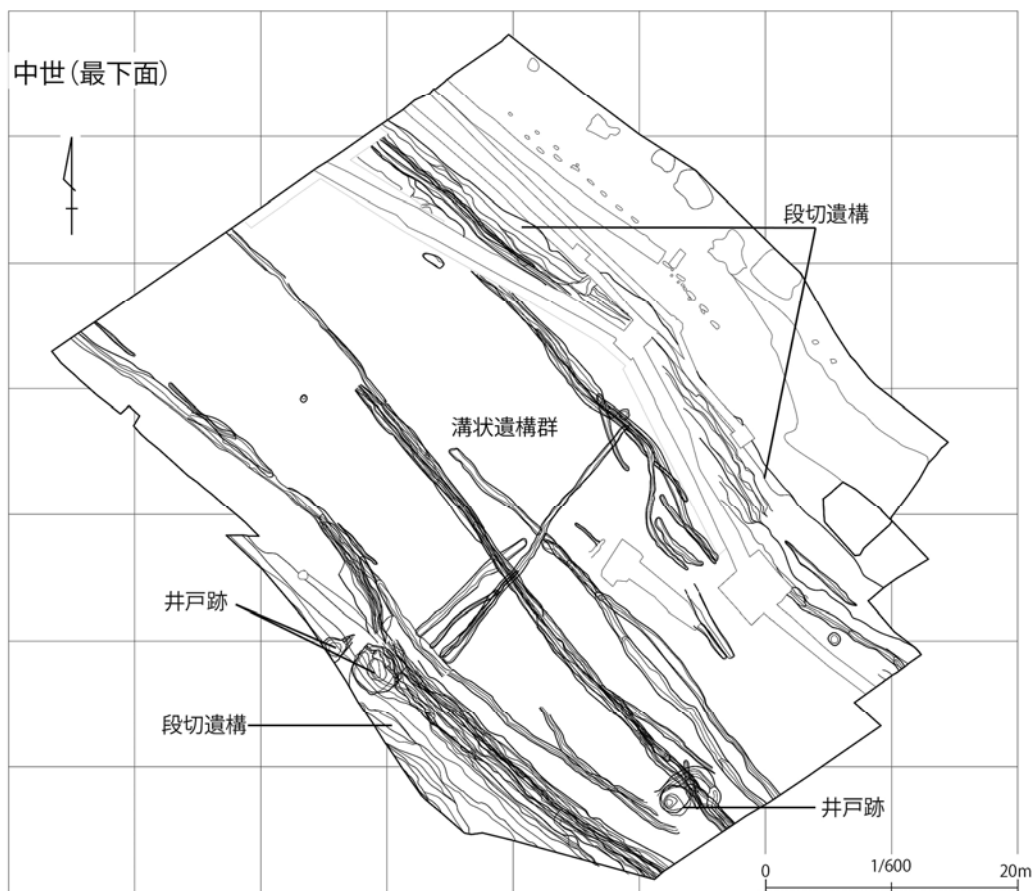
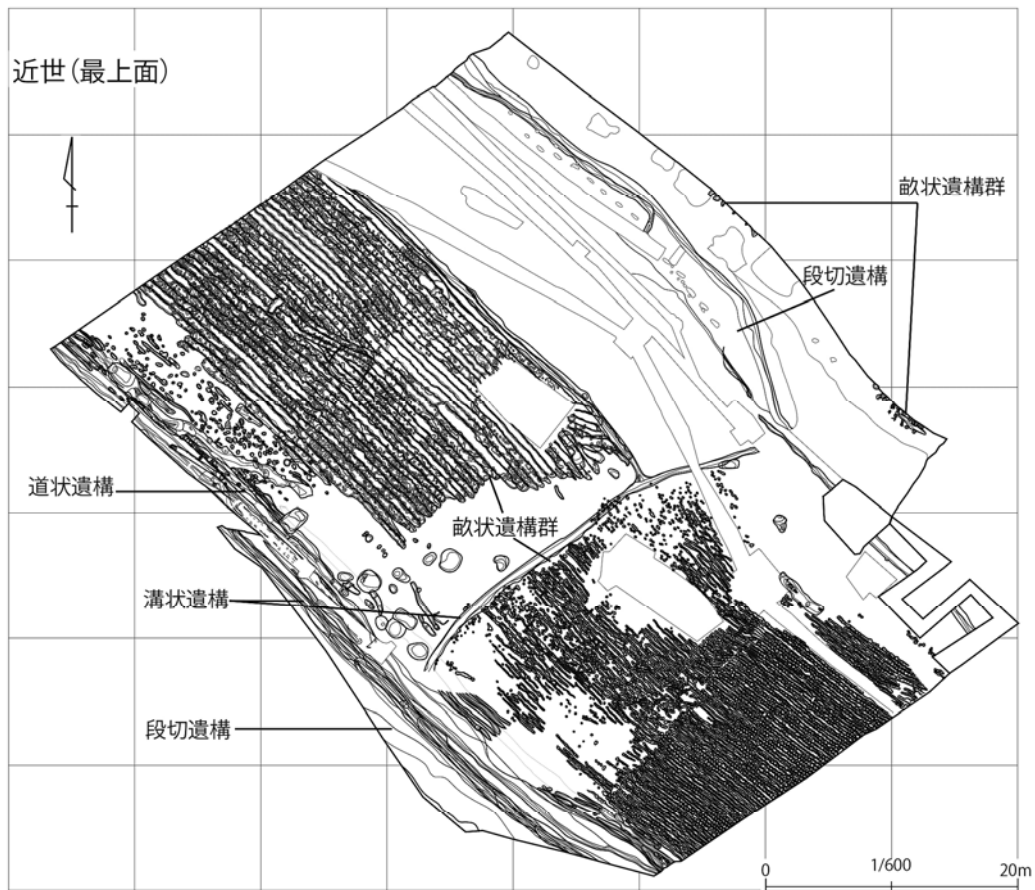
近世 昨年度に引き続き畝状遺構、溝状遺構、道状遺構を確認したほか、斜面一帯で段切・盛土遺構を確認しました。段切遺構は南北の斜面に位置します。傾斜のついた階段状に地形を改変しており整地を目的としていたと考えられます。盛土遺構は南側の階段状となった斜面とその裾部分で確認しました。盛土は性質の異なる土を交互に幾層にも盛り重ねて突き固めていました。また裾部の盛土遺構上には溝状遺構・道状遺構が構築されていることから斜面部分では崩落の保護、裾部分では地盤改良を目的としていたと思われます。

遺物は陶磁器類のほか、煙管、銭貨（寛永通宝）、動物の歯などが出土しました。

中世 近世と同じく畝状遺構、溝状遺構、道状遺構が主体で、段切・盛土遺構、井戸跡なども確認しました。段切・盛土遺構は近世より整然と構築されており、段切遺構の最も古い段階では、階段状の段差部分を等間隔に設置しており、また本来凹凸のある斜面を直線的に成形している状況でした。盛土遺構では土のほか、砂が用いられ、更に積み重ねている層も多く、より堅固に構築していました。井戸跡は計 3 基検出し、2 基では内部から人頭大以上の大型礫や加工が施された樹枝（先端を加工または表面を整形）が重なるように出土しました。

遺物は各面毎に傾向が捉えられました。中世 1 面では瀬戸・美濃産の陶器が多く、2 面では常滑産の甕が増え、3 面では常滑・渥美産の甕・鉢が主体となります。また各面において、舶載青磁、かわらけ、渡来銭が出土しました。

まとめ 昨年度は主に平坦地を調査し、耕作跡と考えられる畝状遺構の広がりを確認しました。本年度は斜面部分を調査し、大規模な土木工事の痕跡を確認しました。この結果から、本地点は畠地で、経営にあたっては運営し易いように地形を大きく改変していることが分かりました。畠地の開発、以降の維持・運営の変遷を知ることでできる貴重な遺跡と考えられます。（土本 医）



第2図 遺構配置図

浄業寺跡第2次調査、三ノ宮・上竹ノ内遺跡

所在地 伊勢原市三ノ宮字竹ノ内地内
調査期間 平成26年12月2日～27年5月14日
調査面積 624 m²
調査組織 大成エンジニアリング株式会社
担当者 高橋直樹・石田広美
調査概要



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

1. 遺跡の位置と調査経過

本遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅の北西約3.2 kmの鈴川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は81.5～87.2 mです(第1図)。本調査は、県道611号(大山板戸)の道路改良事業に伴う事前調査として実施したもので、調査区は、現況崖地の上段(2・3区)と下段(1区)の3区に分かれています(第2図)。

2. 調査の概要

今回の調査は浄業寺跡第1次調査の隣接地で、狭小な範囲にも関わらず中世から近世に至る遺構・遺物が検出されました。以下、その概略を述べます。

近世 検出された遺構は、建物址2棟・柱穴列2条・石組(石垣)2基・配石7基・礫集中範囲1群・溝址5条・井戸址7基・道状遺構2条・土坑9基・ピット270本です。遺物は、1区の盛土層を中心に江戸時代中頃(18C代)の陶磁器類が多く出土し、他に鉄製品・銅銭・石製品・木製品が出土しました。調査区の上・下段に分布する盛土と各遺構の確認面及び出土遺物等を考慮すれば、本遺跡の時期は、①中世末期から江戸時代初頭(16C代～17C代前半)、②江戸時代中頃(18C代)、③幕末以降(19C後半以降)の大略3期に区分できると考えられます。

中世 第1次調査の課題であった中世浄業寺跡に直接関連付けうる遺構は確認されませんでした。しかし、遺物では2区の盛土層の下から、鎌倉～戦国時代(13～15C代)の陶器・中国産陶磁器・瓦・かわらけ・青銅製飾り金具など、「寺院」の存在を匂わせる遺物が出土し、第1次調査の成果を補足する資料が得られました。また、炭化物集中範囲の下から見つかった焼土址からは灰と微細な骨片が検出され「茶毘跡」の可能性が示唆されます。

まとめ 本遺跡の最も大きな特徴は、中世末期～江戸時代中頃の時期に、調査範囲の上段から下段わたり計画的に土地造成が行われていること、そして、1・2区の江戸時代の遺構群はこの造成面を基盤として形成されていることです。また、検出された石垣などから土地造成を行った後は、南東側の低地を埋立て、用地を拡大した状況が看取されます。今後、遺跡の具体的な様相を明らかにすることが課題となります。(高橋直樹・早田利宏)



近世面全景 (南)



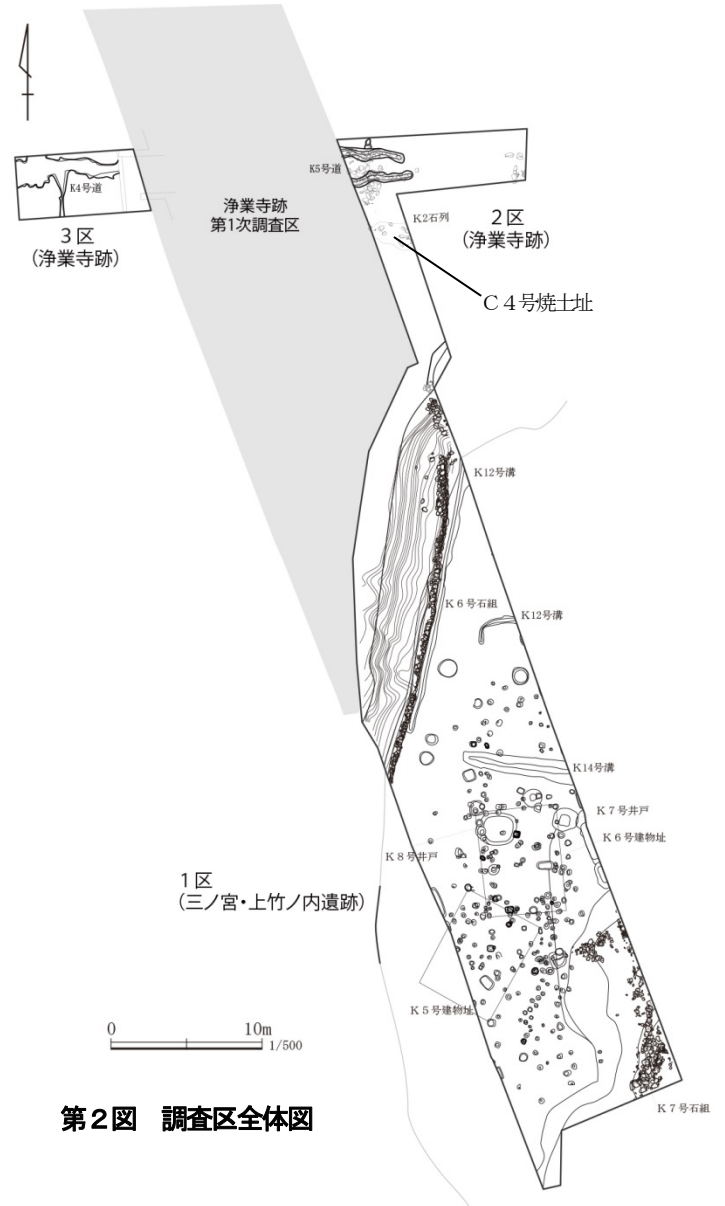
K 6 号石垣検出 (南)



K 7 号石組検出 (南東)



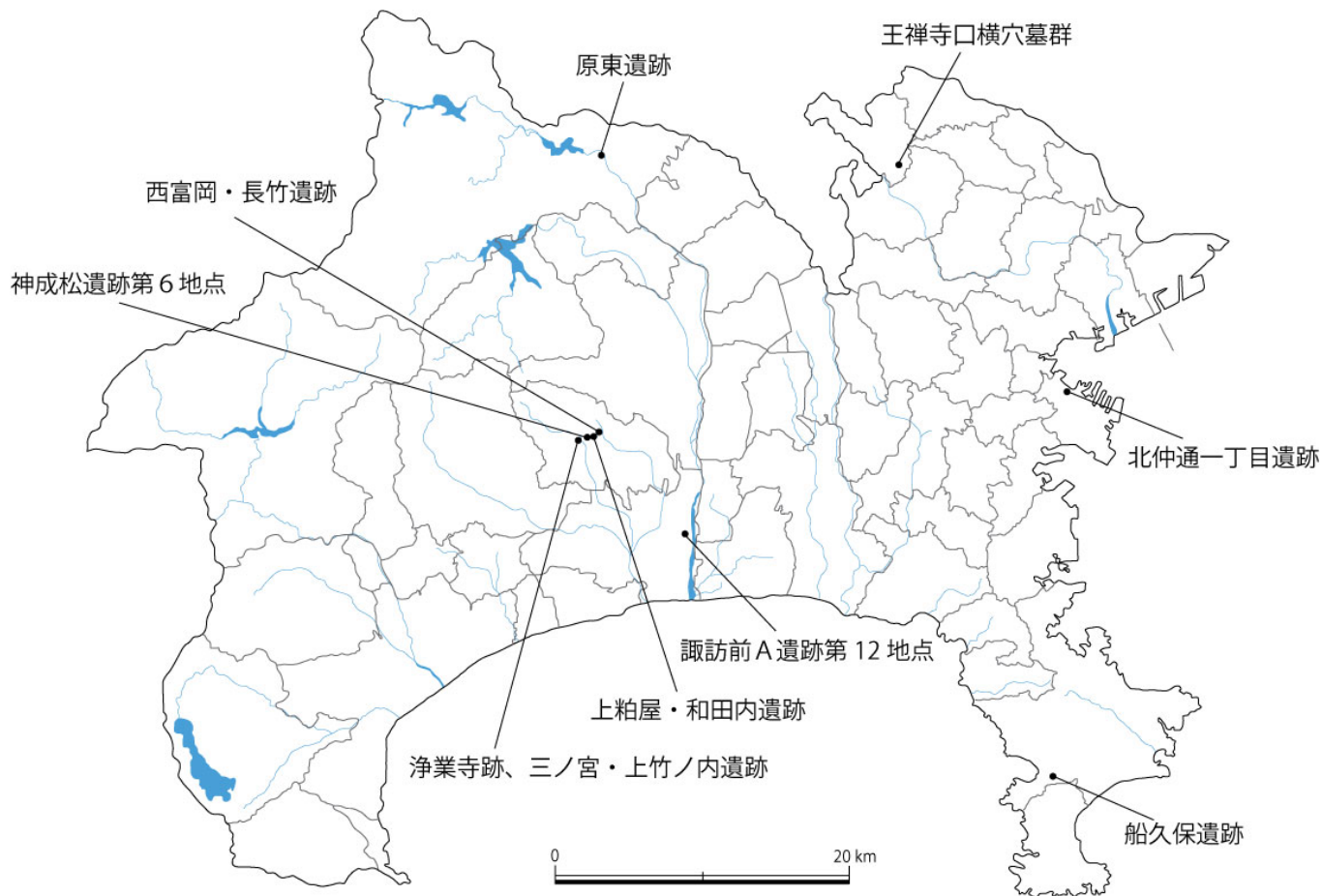
1 区盛土層断面 (北)



第2図 調査区全体図



C 4 号焼土址検出 (南)



今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う事業に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的としています。

平成27年度 第3回考古学講座
神奈川県発掘調査成果発表会 2015

発行日 平成27(2015)年7月26日

編集・発行 神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課

中村町駐在事務所 (神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL 045-252-8661

FAX 045-252-8663